

2024年4月20日

スーパー耐久機構、6月より一般社団法人 スーパー耐久未来機構へ

この度、スーパー耐久機構(STO)は、新法人である一般社団法人 スーパー耐久未来機構(STMO)に事業を承継する事と致しましたのでご案内申し上げます。

STOは1991年の設立以来、スーパー耐久シリーズ(S耐)を開催し、草の根参加型モータースポーツのカテゴリとして、多くのエントラントの皆様、ファンの皆様楽しんで頂いて参りました。

“スーパー耐久シリーズの理念”に則り、クルマやモータースポーツを愛する多くの関係者の方々と共に、業界の健全な発展に向けた取り組みを進めると共に、自動車産業の発展にも貢献するべく、「ST-Q クラス(他のクラスに該当しない、STO が認めた開発車両)」を設置するなど、多くの自動車メーカー・部品メーカーの皆様にも技術開発の場としてもご参加頂ける様になって参りました。

そうした中、スーパー耐久シリーズの価値を将来に渡って高めていく為には、シリーズを運営する STO の体制そのものも強化していく必要があると考え、今回、新法人に事業承継することと致しました。

新法人は、今まで以上に社会課題の解決に取り組んでいけるよう、一般社団法人という形態にし、その理事長には、スーパー耐久シリーズの良き理解者である“モリゾウさん(豊田章男会長)”に担って頂く事になりました。また、その他にも、ENEOS 株式会社様、株式会社ブリヂストン様、三井住友海上火災保険株式会社様、東京海上日動火災保険株式会社様、小倉クラッチ株式会社様、株式会社 SUBARU 様、マツダ株式会社様、トヨタ自動車株式会社様、株式会社デンソー様、株式会社アイシン様にも新法人へ拠出頂ける事となりました。

新法人では、引き続きレース好き・クルマ好きが集まるスーパー耐久の魅力大切に守り・発展させると共に、「1. カーボンニュートラルに資する活動として、新エネルギー車の走行や、CN 出張授業等の社会貢献活動」「2. 草の根モータースポーツの楽しさを普及すべく、アジアなど新しい地域へ取り組みを拡張」「3. 人材育成や地方創生に資する活動として、子供達にクルマやモビリティの魅力を伝達」していき、「明るく楽しい未来のモビリティ社会づくり」に貢献して参りますので、引き続きの応援を何卒宜しくお願い申し上げます。

なお、一般社団法人スーパー耐久未来機構は、5月未までに事業承継を完了させ、6月から新体制による運営に切り替える事を予定しております。また、スーパー耐久シリーズのレース運営は、現 STO の体制を引き継ぎ運営して参ります。

<桑山代表 会見メッセージ>

少しだけ、お時間をいただいて私自身の思いを振り返らせていただければと思います。

2013年3月2日に、夫である前事務局長桑山充が他界しました。

私は、それまで、レースには縁がありませんでした。ましてや、その仕組みは全くわかりません。

当時、ちょうど2013年のエントリーが確定する時期で、
分からないながらもエントリーのとりまとめをしていました。

そんなバタバタな中で、夫の遺志を継ぐことを考え、
なにかわからない気持ちに押されるように「よし、やるか」と決意したのを覚えています。

「晴美さんはお飾りでいいから、あとはこちらでやるから」と言われたこともありました。

しかし、自分で全て分かっていないと、このレースを成長させていくことはできないと思い、
「まずは平たく全部を学ばせてください」と言いました。

皆さん、「えっ」という顔をされていたことも覚えています。
多くの方々に不安な思いをさせてしまっていたのだと思います。

少しすると、気が付いたことがありました。
レース業界は、色々な思いを紙に落としたり、具体的に実行されていく事が、あまり多くないという印象を持ちました。

実務をできるようになって、役に立っていきたい…、
そんな思いでレースに行くようになると、何もわからないなりに、
「はて?」「あれ?」といった課題が見えてくるように感じました。

当時、私なりに行き着いた「スーパー耐久に必要なもの」は
「正しい規則に整えること」と「ブランドを創ること」の二つでした。

その課題を一つ一つ、潰していったのが、今に至るスーパー耐久の11年間だったと思います。

私がかねてから、メーカーの方にお目にかかったとき、
「スーパー耐久をどんどん開発の場に使ってください」とお伝えしてきました。
これは、生前、夫が言っていた、このレースの意義でもあります。

MORIZOさんにも、岡山でお目にかかった際に、お伝えした覚えがございます。
「ST-Q クラス」の新設は、その思いで、即断いたしました。しかし、その時は、まさか水素エンジンという夢のある技術が試される場所になるとは夢にも思っていませんでした。

おかげさまで、スーパー耐久は今、とても良い状態にあると思っています。

チームの皆様、ご協賛企業の皆様にも支えられ、
参加型レースでありながらも、応援して下さるファンの方も増えてきています…

そして、「ST-Q」クラスの盛り上がりによって、
単に楽しいレースだけではなく、自動車産業の一員として果たす役割も見えてきている…。

しかし、このレースの未来を考えたとき、次の段階を考えていけないといけない…
それを、私一個人の小さな会社で運営していく体制でいいのか？
そうした意識も、一方で感じはじめていて、ここ数年は、ずっと悩み続けておりました。

おかげさまで、スーパー耐久は 30 年以上の歴史を積み重ねてまいりました。

このレースが守っていかねばならないことはなにか？
それを守りながらも、関係しているすべての方に、
このレースを通して未来を感じていただくにはどうしたらいいのか？

そうして悩んでいた時に、私の頭の中に浮かんだ方は MORIZO さんしかいませんでした。

スーパー耐久は、とても純粋でまっ直ぐなレースです。
このレースを、ゆがまずに、まっすぐ、成長・発展させていくために、
ご相談できる方は、ただおひとりしかいませんでした。

そんな相談をしていいものか迷いましたが、モリゾウさんは、私の思いを聞いて下さいました。

私一個人の感覚ですが、お金や名誉のためだけに仕事をする方には相談できません。
MORIZO さんが、このレースでやってきたことを見ていて、
そうではないと確信できていたから、相談したかったのだと思います。

私が相談した時、MORIZO さんの第一声は
「どなたか他の方に、このことはお話されましたか」というものでした。

もちろんあなたにもご相談をしていませんでしたので、その旨をお伝えしましたところ、
皆に良いような形になるように考えてみます、とおっしゃっていただきました。

その様な経緯で、MORIZO さんと相談を進めて参りました。

<MORIZO(豊田章男) 会見メッセージ>

日本にはスーパーGT、スーパーフォーミュラ、スーパー耐久とスーパーと名のつくレースが3つございます。

そのスーパー耐久を構築したのが、
前事務局長の桑山充さんでした。

充さんは2つの”大切な想いを込めて、スーパー耐久の理念を作られたそうです。

ひとつは「草の根の参加型レース」であり「割り勘レース」であるということ。
もうひとつが「開発を通じて自動車産業の発展に貢献する」というものです。

2013年からは、桑山晴美さんが、
大変な決意で、レースを引き継がれ、充さんの思いを大切に守ってこられました。

2020年にカーボンニュートラルという言葉が出てきたとき、水素エンジンを、
スーパー耐久の場で走らせて開発をもっと進めていこうという話になり、
相談させていただいたところ、即決でST-Qクラスを新設くださいました。

晴美さんが即決された背景には、充さんから引き継がれた
「自動車産業への想い」があったのだと思います。

桑山さんが、意を決して私に相談いただきました。

「他のどなたかにご相談されていますか？」と私が聞きましたら
「いいえ、まずモリゾウさんに…」と桑山さんは、仰られましたので、
「それであれば」と答えさせていただきました。

その時、私が思っていたのは
「私一人であれば、気を回さずに、動きやすいのではないか？」ということです。

桑山さんは…

「夫が立ち上げたスーパー耐久を引継ぎ、何とかやってくられた…
引き続き“技術を磨く場”として社会課題解決に貢献できる場にしていきたい」

「もちろんS耐を楽しんできたエントラントにも、
もっと楽しんで頂ける場にしたい」

「でも…、体制を強化しないと難しい」

そんな本音をお聞きし、そのお悩みにどうお答えできるのか？社内で相談してみると「OEM連合で引き受けてはどうか？」という案も出てきました。

しかし、この時に思ったのは「モーターショーとオートサロンの違い」…

スーパー耐久は、どちらかというオートサロンです。
OEMが前面に出るのではなく、業界 550 万人みんなで作っていくレース。

クルマ好き、運転好き、そしてチューナーの方々、メカやエンジニアなど多様な方が参加できる枠組みを残していく事が一番大切なんじゃないかと考えました。

こうした考え方を「この指とまれ」と、いろいろな方にお話ししてみたところ、今回抛出頂く各社の皆様に、手を挙げていただけて、本日に至ったという訳でございます。

桑山さんからは、この草の根レースを日本だけでなく世界へ広げていきたい…、特にアジアへ…という想いも伺っておりました。

私自身、去年は、フィリピン、台湾、タイなど、アジアの国々へ参りまして、各国にいるクルマ好きたちの熱を体感して参りました。

スーパー耐久を海外で開催するというのも考えられますが、逆に、アジアのクルマ好き達が「日本のスーパー耐久に出たい！」と思えるようなレースにしていく…というのも良いのではないかと話しております。

そんな新たなスーパー耐久は「みんなで新しい未来を目指していく」という意味を込めまして、団体名を「スーパー耐久“未来”機構」に変更いたします。

略称の STO は、ミライの“M”を入れて、STMO といたします。

一緒に日本の自動車産業を盛り上げていく…、
そしてモータースポーツ業界の明るく楽しい未来を作っていきたい…

この M には、自動車産業にとって、こんなにも素晴らしい場をつくってくださった創始者「ミツルさん」へのリスペクトの気持ちも込めさせていただきました。

このレースがあれば、クルマ好きたちが、ひとつの仲間となって、未来を作っていくことができると思っております。

STMO をよろしく願いいたします。

<一般社団法人スーパー耐久未来機構(STMO)のロゴ>



<STMO 概要>

項目	内容
名称	一般社団法人スーパー耐久未来機構 Super Taikyu MIRAI Organization(STMO)
事業目的・事業内容	モータースポーツの健全な育成・発展・振興を図る為、自ら企画・運営するイベントや派生する事業を行い、もってモータースポーツ、自動車産業、モビリティ社会に寄与することを目的とする (1)モータースポーツ、自動車、モビリティに関する事業 (2)モータースポーツ、自動車、モビリティを通じた社会貢献、国際貢献に関する事業 (3)その他当法人の目的を達成するために必要な事業 (4)前各号に附帯関連する事業
設立(承継)時期	2024年5月31日
社員数	14名
理事	豊田章男(代表)、桑山晴美、加藤俊行
監事	阿部修平
S耐運営体制	現STOのメンバーにて運営
拠出者(敬称略)	ENEOS 株式会社、株式会社ブリヂストン、三井住友海上火災保険株式会社、東京海上日動火災保険株式会社、小倉クラッチ株式会社、株式会社SUBARU、マツダ株式会社、トヨタ自動車株式会社、株式会社デンソー、株式会社アイシン、豊田章男、阿部修平、桑山晴美、加藤俊行

三井住友海上
東京海上日動
Crafting the Core

<スーパー耐久の理念>

スーパー耐久シリーズ（S 耐）は、1991 年より市販量販車をベースとした日本発祥、日本最大級の参加型レースとして歴史を重ね、今日までプロドライバーとレースをライフスタイルの一部とするアマチュアドライバーが共に協力し合い、覇を競いつつ継承してきたチームスポーツである。

スーパー耐久に集う人々は、いつの時代もクルマやモータースポーツ、人を愛する「仲間」であり、互いに絆を深め合い、称え合い、スポーツマンシップ（ルールを厳守し、競技を行っていく基本的な姿勢）にのっとり、正々堂々と闘って欲しい。そして技術を向上させるなか、限りある資源を大切に使い、環境に配慮しながらモータースポーツ社会の発展につなげていくことを目指したい。

安全を第一優先にフェアな競技を、そして単に順位を競い合うだけではない、モータースポーツを通して、「人生に挑戦し続ける」ことで獲得できる、人それぞれの「何か」を生み出して欲しいと願う。

また、スーパー耐久に参加するエンタラントの知識やノウハウを生かした自動車用品や部品の開発・販売により、日本の自動車産業、モータースポーツマーケットの発展に寄与していくことも目指そう。

スーパー耐久に関わる全ての人々にはこの理念を理解していただきたい。そして自分たちが生きた証としてモータースポーツを次の時代につなげていくためにも、ひとつとなり、共に発展させていこう。

以上